

## 第10回作業科学セミナー佐藤剛記念講演

### 作業科学：佐藤剛が手渡したかったもの

小田原悦子, PhD, OTR

要旨：佐藤剛（1943～2002）は、作業療法がリハビリテーション医療の技術職としてわが国に導入された1960年代にアメリカに渡り作業療法士になり、各種の作業療法の知識、技術を国外から紹介し、日本における作業療法教育、研究に貢献したパイオニアの一人であり、長年に渡り世界における日本の作業療法士を代表してきた。しかし、余りにも突然に逝去したため、作業科学を日本に紹介した彼の意図はよく理解されていない。本研究は、彼の軌跡を歴史的に辿り、その希望、夢を追い、彼の目的を探る。そこには、作業療法史の証人となって、国際的視野で日本の作業療法の行く末を展望し、作業科学を我々に手渡そうとした彼の姿が現れる。

{キーワード：作業科学，作業療法史，作業療法理論}

---

1917	The “National Society for the Promotion of Occupational Therapy” (NSPCT) established
1922	NSPCT rename the “American Occupational Therapy Association” Adolf Meyer publishes his article “Philosophy of Occupational Therapy”
昭和18年（1943）	佐藤剛誕生（北海道）

---

#### はじめに

1960年代、アメリカの作業療法を手本に始まった我が国の作業療法は、その後も知識と技術を輸入しては応用して、その臨床分野と教育体制を発展させてきた。一方、日本の社会構造が大きく変動し、それに伴って医療、福祉体制も大きく変化する中で、作業療法士は臨床領域を拡大し、この40年間に作業療法士の数はゼロから3万人を越え、専門職としての知名度も高まった。作業療法士の養成校は約200にもなり、その教育課程は専門学校、学部、大学院課程と多様化しているが、障害者や老人のニーズを充たすための、臨床の作業療法に適切に貢献する理論を獲得していないと言われて久しい<sup>1-3)</sup>。さらに、身障、小児、精神、老人と多様な臨床分野で活躍する作業療法士が共有できる基礎理論を持ち合わせていないという専門職としての弱点を指摘する声が作業療法士自身から聞かれ、専門職として社会の要請に応えるだけの自信に不安を覚えるという訴えもある。例えば、老人臨床分野では、1980

年代の高齢人口の爆発的増加以来、作業療法士は社会の要求に責任を感じながらも、当事者である老人とその家族の示すニーズと行政や保険体制からのニーズの狭間でジレンマに悩んでいる<sup>2, 4)</sup>。

本論文では、作業療法の普及のために活躍し、作業科学を日本に紹介し、2002年に逝去した日本の作業療法のパイオニアのひとりである佐藤剛の軌跡をたどりながら、彼の夢を探り、日本の作業療法士にとっての作業科学の必要性に焦点を当ててみたい。1943年に北海道に生まれ育った佐藤は、アメリカで作業療法教育を受けた。2度の留学とアメリカでの作業療法士の臨床経験を経て、日本の作業療法教育に従事した佐藤は、長年に渡り、日本の作業療法士に作業療法の各種治療理論をアメリカから紹介した。特に、感覚統合の普及に力を尽くし、数多くの研究業績を残した。佐藤は、日本の作業療法教育に従事し、早い時期からその高等教育の必要性を訴え、遂に、札幌医科大学で大学院課程を開設し、作業療法高等教育設立に貢献した。彼は当初から国際的な作業療法士だった。アメリカと日本、アジアと日本間で作業療法にまつわる情報、知識、技術を提供しては、国内及び、国際的な作業療法士組織のために貢献し、国内では専門職としての作業療法の社会的知名度を築き、世界の作業療法士に対して日本

---

聖隷リハビリテーションプラザIN高丘  
南カリフォルニア大学作業科学作業療法学部  
〒433-8119 浜松市高丘北1-43-45-102  
etsukoodawara@yahoo.co.jp

---

1950s	Occupational therapy in the U.S.M strongly influenced by model model
1952	“World Federation of Occupational Therapy” (WFOT) established
1960s	Universities begin offering masters degrees in occupational therapy Gary Kielhofner describes “Model of Occupational Behavior”
昭和38年 (1963)	作業療法教育始まる
昭和39年 (1964)	理学療法士・作業療法士法

表1 質問内容

- ・佐藤先生の人となりについて
- ・佐藤先生の日本の作業療法への貢献
- ・佐藤先生のカルチャーショックとアイデンティティ  
ー・クライシス
- ・世界の作業療法と佐藤先生
- ・作業療法にとっての医療モデルと保健モデル
- ・作業科学への期待
- ・作業科学の日本での貢献
- ・自信を持って貢献するために作業療法士は何をしな  
ければならないか
- ・日本の作業科学についてのコメント

表2 佐藤文献と研修会資料

- ・作業療法領域の研究テーマの概観ー日本と米国ー  
これまでの日米のOT理論の分析とこれからの日本の  
作業療法の展望 (1986)
- ・四半世紀からの出発ー適応の科学としての作業療法  
の定着を目指して (1992)
- ・作業療法の理論的体系ーその概念的枠組み, パラダ  
イムおよび実践モデルの発展と現状 (1995)
- ・作業療法理論の再考 (1995)
- ・万国共通の作業定義の構築に向けて (2000)
- ・作業療法 (2002)
- ・全国研修会資料 (1995, 札幌)
- ・全国研修会資料 (1998, 山形)

の作業療法をアピールした。

その創設期から日本の作業療法の臨床, 教育, 研究に貢献し, 常に国際的な視野で日本の作業療法の将来を展望してきた佐藤は, 1990年代に, 作業科学を日本の作業療法士に紹介し, 作業科学セミナーを開催し, 大学院課程に作業科学の講座を開設したが, 彼の意図はよく知られていない。なぜ, 日本に作業科学が必要であると佐藤は考えたのだろうか? 作業科学にかけた夢, 思いを雄弁に語ることなく, あまりにも, 唐突に我々の元から去っていった佐藤に誰も聞くことが出来なかったこの疑問に答えるために, 創設期からの作業療法の歴史を俯瞰し, 彼が残した軌跡を辿りながら, 日本の作業科学に彼が抱いた夢を展望してみたい。

### 方法

本研究は佐藤剛が作業科学に託した夢を探るために, 彼の足跡を歴史的に分析する質的研究である。そこから, 日本における作業科学の必要性を探ろうという試みである。本研究のリサーチャーである私は, 日本に生まれ育ち, 1970年代に日本の作業療法養成校で作業療法教育を受け, 日本における臨床経験と作業療法教育経験を持つ作業療法士である。佐藤から教育を受けた経験はない。佐藤とともに勤務した経験もない。

しかし, 私が作業療法についての興味を発展させ, 南カリフォルニア大学作業科学作業療法学部在籍中に博士研究を遂行するために, 佐藤から助言や援助を受けた。その過程で, 佐藤が作業科学にどのような夢, 期待を持ったのか興味を持つに至った。第10回作業科学セミナーの佐藤剛記念講演を依頼されたことを機会に, 本研究を遂行した。

データを収集するために, 佐藤と交流のあった日本, アメリカ, カナダの作業療法士と彼の家族の計10名にインタビューを施行した。インタビューを受けた作業療法士たちには佐藤の同僚, 彼の学生, 国内外の作業療法士の組織で佐藤とともに活躍した人たち, その他に彼と親交の深かった作業療法士が含まれている。インタビューは直接面談か, 電話で行った。時間には制限を設けずに, 準備した質問に対して自由に答えてもらおう, 半構成的インタビューの形をとった。インタビューに要した時間はインタビューを受けた人によって異なるが, 30分から2時間だった。準備した質問はその人の立場や佐藤との関係を考慮して準備した。表1に, インタビューでおこなった主な質問事項を示す。佐藤が著したリハビリテーションや作業療法関係の論文及び講習会の挨拶文と資料も本研究のデータとして使った (表2)。これらのデータを使って, 1917年の

---

昭和41年（1966）	佐藤剛，東京教育大学体育学部健康教育学科卒業
1967-69	サンホセ大学在籍
1970	OTR資格取得 ロスアンジェルス郡病院勤務
昭和45年（1970）	帰国，九州リハビリテーション大学校勤務
昭和48年（1973）	世界作業療法連盟加盟

---

創設以来，変遷に満ちた作業療法の歴史の中で，佐藤が抱いた夢，作業療法，作業科学に彼が期待していたこと，懸念していたことを探求する。

### 作業療法の歴史と佐藤剛の軌跡

1917年アメリカのニューヨークで，作業（何かすること）が人の健康と幸福を促進するという確信を持った人々が集まり，作業療法促進協会The National Society for the Promotion of Occupational Therapyを発足した。彼らは，20世紀初頭に起こった種々な社会的活動に従事する中で作業の力に気が付いた多職種（医師，看護婦，建築家，ソーシャルワーカー，職業カウンセラー）の人たちだった。彼らは，障害を持った人々の健康を促進するために，作業を考え，使う専門職の必要性を確信し，その専門職をつくるために，社会に働きかけることが必要であることを互いに確認し，作業療法促進協会を設立した<sup>5-7)</sup>。例えば，この会のリーダーであるBartonは，結核の闘病生活から，作業を使って社会に復帰した経験がある建築家だった。Slagleはソーシャルワーカーで，ヨーロッパからの移民がアメリカ社会に適応するために援助する活動に従事していた。これらの創設者たちが信じていた，作業は障害を持った人々の健康を促進するという哲学は，後にMeyerが論文の中で発表した「作業モデル」と呼ばれるものである<sup>7)</sup>。

1910年代，第1次世界大戦後の戦傷兵を対象にした実践を通して，作業療法はアメリカ社会に認められていき，大学に作業療法教育課程が開設された。1920年に，作業療法促進協会はその名称をアメリカ作業療法協会に変更した。1922年にはMeyerが「作業療法の哲学」<sup>9)</sup>を発表した。二つの大戦を経て，作業療法士は増加し，その知名度は増していった<sup>10)</sup>。

佐藤剛は，1943年，北海道北見で生活していた屯田兵の家族の6人兄弟の末っ子として誕生した。当時，日本には作業療法という専門職は存在していなかった。一方，アメリカでは，世界大戦の戦傷戦病兵の治療を通して，作業療法という専門職は，徐々に社会に

広まっていったが，作業療法士たちは，その実践の中で医療の影響を強く受け，自然科学的な見方で患者を治療する傾向を強めていった。1950年代に，この医学モデルの作業療法は全盛となり，作業療法関連の雑誌は，疾患別のアプローチを満載するようになった<sup>7, 8)</sup>。

日本における作業療法の誕生は，アメリカにおける設立とは全く異なり，国外からの輸入という形で始まった。1940年代，敗戦後の日本は疲弊していた。国民の健康増進と福祉国家建設を模索する日本政府は，リハビリテーション医療を導入する目的で，リハビリテーション事情の視察のために医師を欧米に派遣した。その医師たちがリハビリテーション医療の専門職のひとつとして作業療法士の必要性を政府に提言し，日本に作業療法士という専門職が導入されることになった。1960年代に，当時の厚生省によって設立されたりリハビリテーション学院において，作業療法教育が始まり，その後，私立，文部省系，労働省系の養成校が各地に設立されていった。1960年代の日本には，作業療法を教育できる作業療法士はいなかったため，外国人作業療法士，多くは，日系アメリカ人の作業療法士が講師として招かれ，日本の作業療法士養成に従事した。順次，外国で作業療法教育を受けた日本人作業療法士と日本で教育を受けた作業療法士が交代していった<sup>11)</sup>。

日本における作業療法教育が国立療養所東京病院付属リハビリテーション学院で始まった1963年，佐藤は20歳であり，東京教育大学体育学部健康教育学科に在籍するバスケットボールが好きな学生だった。自然人類学の木村博士に師事し，健康に関する学問に興味を持ち，その分野の専門職になるためにアメリカ留学を希望するようになった。日本の作業療法教育の第一世代が，国立療養所東京病院付属リハビリテーション学院を卒業した1966年，佐藤は23歳だった。東京教育大学を卒業し，留学の準備をしながら，母校の自然人類学の研究室に勤務していた。

1967年に佐藤は渡米し，カリフォルニア州にあるサンホセ大学に入学した。彼はTimと名乗る，好奇心旺盛

1976-80	渡米，小児の作業療法実践 修士課程，感覚統合専門コース修了
1970s—1980s	Development of “Adaptation theories, the “Sensory Integration Model, and the ” Model of Human Occupation”
昭和58年（1983）以降	帰国，札幌医科大学衛生短期大学部勤務 感覚統合研修会開催 日本作業療法協会理事 世界作業療法連盟日本代表，副会長

盛で社交性のある学生だった。1969年，作業療法専攻課程を修了し，1970年に作業療法士免許を取得し，ロスアンジェルス郡病院の成人身障者のデイケア部門に半年間勤務した。この留学中に日系アメリカ人の Dale Ann と知り合い，結婚した。

1960年代アメリカでは，作業療法の高次教育が始まっていた。1964年に，南カリフォルニア大学に作業療法の修士課程が設立され，1969年には，当時の主任教授 Reilly が学部全体を統率して作業行動を中心理念にした作業療法のための理論構築に挑み，興味チェックリスト，段階付けの理論，等が発表された<sup>11)</sup>。

佐藤は1970年に帰国し，九州リハビリテーション大学校で教職につくと，小児リハビリテーションの高松鶴吉先生と協力し地域の障害児のために活躍した。学生たちに呼びかけて障害児と親の会を作り小児の作業療法を模索していた。この時期の学生にとって，佐藤の講義は難解だったが，彼は学生たちに親しく話しかけ，学生が国際的な視野を持つ作業療法士になるように興味を喚起していった。

日本に作業療法を広めようと意欲をもって帰国したが，日本の医学的リハビリテーションの教育現場で医師や理学療法士，作業療法士に囲まれた佐藤は，周囲から十分には理解されず，必ずしも馴染んでいないように，当時の同僚や学生の目には，映っていた。

1976年，佐藤は小児分野の作業療法士として専門性を高めるために再度渡米した。カリフォルニア州ロスアンジェルス郡に隣接するオレンジ郡の学校区に所属する作業療法士として臨床に従事しながら，カリフォルニア大学で特殊教育の修士号を取得し，感覚統合療法の資格コースを終了し，南カリフォルニア大学の作業療法学部で修士課程を修了した。この時期に感覚統合療法の資格コースで受講した Ayres を尊敬し師事し，強く影響を受けるようになった。

佐藤が二度目のアメリカ滞在中で，小児分野の臨床を経験しながら，障害児教育のための理論，作業療法ア

プローチの技術を習得していた1970年代，アメリカの作業療法士は地域に実践の場を拡大していった。その背景には，精神分野の慢性疾患を持つ人々および身体障害を持つ人々が病院から地域へ開放されたという医療及び社会事情が大きく関与している。それまで病院で行っていた疾患別アプローチを中心にした作業療法サービスを，そのまま障害者たちの生活の場である地域で実践しようとした作業療法士は，困難に直面していた。

佐藤が一回目の渡米で作業療法士になり，二回目の渡米で，専門教育を収めた1960年代，1970年代は，アメリカの作業療法士が理論化，専門化に目覚めた時期でもあった<sup>12-15)</sup>。南カリフォルニア大学の作業療法学部では Reilly のもと，地域で生活する障害者や慢性疾患の人々のための作業療法の臨床モデルを作るための基礎となる理論を構築する試みが始まっていた。作業療法学部在籍した学生たちは，Reilly が提唱した作業行動モデルの考え方を使った臨床実践に取り組んでいた。例えば，数人のグループを構成した学生たちは，作業行動モデルを使って患者たちにアプローチするように慢性精神患者の収容施設に送られると，興味チェックリスト，役割理論，仕事と休息の理論を使って，収容施設で無為に過ごす分裂病（現：統合失調症）患者たちを作業に導入しようと試行錯誤を繰り返した。例えば，ギター演奏，絵を描く，クラフトづくり，歌をうたうという作業を使って患者たちに働きかけていたが，作業療法アプローチのためのマニュアルを提示されることなく，地域の施設に送られた学生は，どのように作業行動モデルを臨床に応用してよいかわからず，教授陣に対して不満や怒りをもちながらも，試行錯誤を繰り返して，彼らの活動が地域の作業療法を築いていった。そしてこの世代が地域の作業療法のパイオニアになっていった。

佐藤がアメリカで作業療法士資格を取得し，臨床を経験して一旦帰国し，再度渡米し専門性を深めた時期

昭和61—63年（1986—1988） 討論会「作業療法 その核を問う」—日本作業療法学会—

1980s—1991 Beginning of Occupational Science

平成5年（1993） 総論研修会

（1970—1980）は、アメリカの臨床の作業療法が、患者の見方を、還元論的で自然科学的なものから、地域に生活する社会的存在として見るように大きく変換しなければならない時期でもあった。そして、健康に貢献する作業の専門職として、人々の環境への適応を促進するために、各臨床分野を包括的にリードする理論作り着手した時期でもあった<sup>12)</sup>。佐藤は、アメリカの作業療法界に起こったこの劇的な変化を、サンホセ大学の作業療法教育、初めての作業療法臨床経験、その後のAyersに師事した感覚統合の専門教育、Reillyが指導していた作業行動モデルを基礎とした南カリフォルニア大学大学院教育という環境の中で、実際に見聞き、感じていたはずである。

さて、日本の作業療法は、ちょうど佐藤が一回目のアメリカ留学で作業療法教育を受けていた時期に、アメリカの作業療法士たちを講師に招き、当時のアメリカの作業療法の知識、技術を輸入して、その基礎を作り始めた。ところで、この1960年代のアメリカの作業療法は、作業療法の設立者たちが提唱していた「作業は人の健康を促進するという作業療法の哲学、作業療法とは、健康を促進する作業の力に価値を置く専門職であり、人を社会的な存在として考える」という信念を失っていた<sup>8)</sup>。アメリカの作業療法史のどの時期よりも還元論的な患者の見方、つまり自然科学的な、機械論的な人間観を示していた<sup>8)</sup>。つまり、日本がアメリカから輸入した作業療法は、その歴史の中で最も自然科学的な傾向の強い、医学モデルの影響を受けた時期のものだった。つまり、日本の作業療法は還元論的な患者の見方を持って、疾患別の機能改善に焦点を合わせたアプローチを輸入して、その基礎を築いたことになる。

日本における作業療法は、1965年に制定された理学療法士及び作業療法士法の中で、「作業療法とは、身体または精神に障害のあるものに対して、主としてその応用動作能力または社会的適応能力の回復を図るため、手芸、工作、その他の作業を行わせることを言う」と定義付けられた。佐藤は後に、作業療法を機能回復中心のアプローチとしてとらえたこの定義について、「ここでは、作業がクラフト活動をすることにより機能回復が期待されるような定義になっており、当時の

考えを想像できる」と指摘した<sup>16)</sup>。

さらに、このような誕生の状況が、日本の作業療法教育にも決定的に影響していたことを、佐藤は次のように指摘した。「当時の（日本の）OTの教科書は、アメリカの作業療法上最も医学モデルに影響を受け、作業療法の理論的基盤の記述が全くない、疾患別の作業療法が主体になっていました」<sup>16)</sup>。

1980年に2度目の留学から帰国した佐藤は、作業療法教育に従事し、感覚統合の講習会を全国各地で開催し、論文を著し、感覚統合を日本全国に広めていった。アメリカで見聞した作業療法の専門性の重要性、必要性を周囲に強調するとともに<sup>17)</sup>、日本における作業療法の高等教育の普及を訴え、実現することが、この時期の佐藤の目標だった<sup>18)</sup>。その後、彼は札幌医科大学に作業療法学科を開設し、作業療法高等教育の夢を、学部課程、修士課程、博士課程と実現していった。

佐藤は、世界の作業療法士の間で有名な数少ない日本人の作業療法士の一人だった。作業療法士としての多様な活躍、海外での学生経験、臨床経験、国内での教育経験、国際的な交流から作り上げてきた佐藤の視野は、常に広く将来を展望するものであった。1973年に日本が世界作業療法連盟に加盟すると、佐藤は常務理事として、あるいは教育部の世界作業療法連盟学校認可委員会員として活躍を続けた。流暢な英語を武器に、世界における日本の作業療法士の存在をアピールし続けるだけでなく、他の日本人作業療法士たちが国際会議で発言する機会を提供し続けた。佐藤は、西洋社会の作業療法士たちだけでなく、東南アジアの作業療法士たちとの交流に力を入れ、日本の作業療法士に向かつては、西洋社会とは異なるアジアの作業療法を探求するように働きかけ続けた<sup>19)</sup>。

### 佐藤の使命

佐藤は世界の作業療法の多様性と歴史的变化を経験しながら、自分の使命に目覚めていった。そこには、広い視野、豊富な経験を獲得し、周囲からその実績を認めらながら、個人として、作業療法士としてアイデンティティークライシスに悩む佐藤の姿がある（図1）。佐藤は、最初の渡米以来、Timと名乗っていた。アメリカにやって来る外国人は、その方がアメリカ社会に

平成7年（1995） 第一回作業科学セミナー開催  
 平成10年（1998） 札幌医科大学博士課程に作業科学講座開講  
 平成14年（2002） 逝去

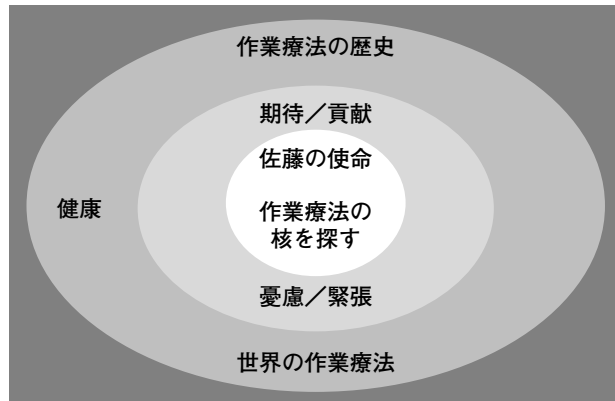


図1 佐藤の使命

同化しやすいという理由で、しばしばアメリカ風の名前で自分を周囲に紹介する。そして日系アメリカ人や日系カナダ人たちは自分の子どもにSusanやFrankと名付ける。アメリカ社会で作業療法を吸収して日本に持ち帰ろうとした佐藤は、まずアメリカの社会に同化したかったのだろう。そして、その延長としての国際社会でTimとして知名度を高めていったのだろうが、後年、その名前を剛に戻りたいと、親しいアメリカの作業療法士に漏らしたことがあった。日本人としてのアイデンティティーを明確にしたくなっただろうが、彼の意に反して、現実的にそれは困難だった。

作業療法士として、国内外で経験を積み、理論を学び、世界の一人として日本の作業療法を概観し、その将来を展望するに連れ、佐藤の作業療法士としてのアイデンティティークライシスは深刻なものになっていった。海外で作業療法教育を受け、その後、国内外の作業療法の歴史を熟知していった佐藤は、日本の作業療法の状況から少し距離をおいた彼の立場だからこそ、より深刻に日本の作業療法の将来を憂慮し、次のように述べたのだろう。「作業療法士としての個人的なアイデンティティーの壁に3回遭遇したように思う。第一には、1970年頃のが国のアメリカの一面的な医学モデルの導入と、日本で強化された医学モデルとのはざままでアイデンティティークライシスに陥らざるを得ない境遇に日本の作業療法が置かれていたような印象をもった。障害者を社会的人間の視点から検討されず、身体機能回復の観点のみで訓練し、社会復帰後生

かされることの少ない病院内訓練をしていたことに対する違和感であった。それは、作業療法士としての専門職としての誇りを失わせる状況でもあった。（下線は筆者による。）<sup>19)</sup>。この読み手にとって難解な文章は、一回目の留学から帰国した佐藤の困惑ぶりを強烈に伝えている。

佐藤が、1967年に渡米してサンホセ大学の作業療法士資格課程に在籍した頃は、作業療法の創設者が見出した作業の力に価値を置く作業療法の哲学が還元論的な傾向に押されて、後退した時代だった。1967年から1970年に、アメリカの作業療法専攻学生だった佐藤は、自身が受けた作業療法教育の機能主義的傾向について、「私がアメリカで作業療法を学んだ1968年ごろの教科書には、身体障害領域での目標は必ずといってよいほど、1 ROMの改善、2 筋力の改善、3 運動協調性の完全、そして4 身体の耐久性の改善、というのが登場し、次にADLや職業前との関係で作業療法目標があげられていた」と述べている。しかし、佐藤が作業療法士の資格を取得し、半年間臨床に従事したアメリカの作業療法士の世界では、医学モデルの影響を脱して、作業療法の包括的な理論化を目指す新しい波が、既に現れ始めていた。Reillyのもと、南カリフォルニア大学では、人と環境の関係を作業行動として捉えて作業療法の全体性を取り戻そうとしていた。

アメリカで作業療法の歴史を学び、それを背景に展開した作業療法の臨床を経験した佐藤は、帰国した日本の現状にショックをうけたのだろう。彼を迎えたのは、設立者の信念である「作業の力」「社会的存在として患者をみる」ことを失っていた<sup>7,8,15)</sup>アメリカの作業療法を手本に、つまり、最も医学モデル（自然科学的見方で患者を扱い、疾患別アプローチを特徴とする）の影響を受けた時期のアメリカの作業療法士を介して、さらに、その時代にアメリカで教育を受けた日本人作業療法士を介して、その技術と知識を輸入し発展させていた臨床の姿だった。

佐藤が経験したアイデンティティークライシスの背景には、アメリカと日本の作業療法が背負ってきた歴史があることが分かる。その狭間で佐藤は、その時代の作業療法の苦悩を経験したことになる。帰国した佐藤は、当時既に、その特徴を形成しつつあった医学的

リハビリテーションという専門職集団の中で期待される作業療法士の役割に、戸惑いを覚えていたらしい。佐藤の言葉を再度検討すると、日本の作業療法士のアイデンティティークライシスというより、佐藤の立場、彼の作業療法士としての経験だからこそ感じた悲痛な叫びが伝わってくる。佐藤の言葉を繰り返させてもらおう。「1970年頃のわが国のアメリカの一面的な医学モデルの導入と、日本で強化された医学モデルとのほごまでアイデンティティークライシスに陥らざるを得ない境遇に日本の作業療法が置かれていたような印象をもった。障害者を社会的人間の視点から検討されず、身体機能回復の観点のみで訓練し、社会復帰後生かされることの少ない病院内訓練をしていたことに対する違和感であった。それは、作業療法士としての専門職としての誇りを失わせる状況でもあった。」<sup>19)</sup>。当時の日本の作業療法の現状について、ここで記述されているように、還元論的な考え方に強く影響を受けた作業療法が日本に輸入され、その後硬化していった状況を佐藤が理解できたのは、彼が習得したアメリカの作業療法史の知識と彼自身の経験のおかげによることだが、彼の文章から伝わってくる。歴史的結果、日本の作業療法は、病院を中心とした、身体機能中心、疾患別の機能を焦点にしたアプローチとなり、必ずしも障害者が地域社会で生活するときの援助にならないと、佐藤は結論付け、そのために、専門職である作業療法としてのアイデンティティに疑問を抱いたことになる。そのような日本社会の作業療法士の姿は彼を失望させ、専門職としてのアイデンティティを危うくするものであった。当時の日本の作業療法の状況と、作業療法の創設者の提唱した作業の力を信じる作業療法の哲学を対照して、佐藤はその格差に落胆した。作業療法のアイデンティティークライシスとして、佐藤は次のように続けている。「第2の壁は、作業療法の包括的、全人格的と呼ばれることに対する、空虚感と無力感の襲来であった。表現はすばらしいが抽象的であり、実際に作業療法が認識されているイメージとギャップが余りにも大きく感じられた」<sup>19)</sup>。

### 作業療法の核

1967年から1982年の2度の在米期間に、佐藤は臨床でも大学でも、アメリカの作業療法という専門職の世界が大きくなうねりを上げて成長しながら、相反する二つのパラダイムを経過する様子を興奮しながら経験したのだろう。世界大戦による需要を背景に、リハビリテーション医学との連携で、作業療法は職域を拡大

しその知名度を向上させていったが、60年代にその臨床分野全体にみられた機能に偏重したアプローチに対する疑問と不安の声、この専門職の将来を模索する作業療法士の間から現れた。Yerxaは、専門職のあるべき姿として、患者を臓器、機能、部分の集合として扱う、還元論的な姿勢ではなく、人を生きる存在として哲学的に考え、その幸福のために健康のために援助する“authentic (本来の)”作業療法を主張した<sup>15)</sup>。1970年代には、臨床の作業療法をリードする作業療法理論を構築する必要性が力説された。Meyerの「作業療法の哲学」に代表される作業療法の設立者たちの考えを基礎に、Reillyは、適応、仕事と休憩、作業役割についての理論を展開し、臨床作業療法の基礎となるための作業行動モデルを模索し始めた。Reillyの学生だったKielhofner& Burkは、作業行動から発展させた人間作業モデルを提唱した<sup>20)</sup>。一方、この時期作業療法の臨床分野では、Ayers, Bobathがそれぞれの分野で専門性を高めていった<sup>7)</sup>。佐藤は、二度のアメリカ滞在中に、作業療法が従来の医学モデルから変貌してゆく革新的な動きを目の当たりにして、そこにあふれる新しい息吹を感じて帰国したのだろう。そこで待っていた日本の状況に、彼は一挙に時代が逆流したような、めまいにも似た感覚を覚えたのではないだろうか。それを「作業療法士としてのアイデンティティークライシス」と表現したのだろう。

1980年代の佐藤は、この危機感をバネに、作業療法の中核概念、理論探しの旅を始めたと考えられる。まず、作業療法の定義、作業療法の臨床場面について議論し、その還元論的、機能中心主義的な考えへの偏りを指摘する。1984年日本作業療法協会は作業療法の定義を「作業とは、心身に機能の障害をもつ者またはそのおそれのある者に対し、主体的な生活の獲得を図るため、諸機能の回復、維持および開発に役立つ作業活動を計画し、指導することをいう。」と制定した。佐藤は、当時の日本の作業療法室で日常的に見られた臨床の一コマを例に、この定義に見られる当時の作業療法の機能回復偏重を次のように批判している。「作業という名のもとで木工作业も、ファシリテーションの為のサンディングという形に変身せざるを得ない状況にあったといえる。つまり、木という材質を使っているが、実際には、そこには理学療法と類似した機能回復訓練であり、適応という概念が生まれる余地はあまりなかった」<sup>16)</sup>。佐藤は、当時アメリカで作業療法理論の中心概念となりつつあった適応という考えを使って、(作業療法士の)患者の扱い方を批判している。

テーブル上に置かれた板にヤスリかけのブロックを置き、運動学的目的を充たすように、板の角度や道具を動かす方向を調整するサンディングは当時多くの作業療法室で見られた。神経筋促通手技や筋力強化、関節可動域改善の目的という局所的、自然科学的な治療目的で使われていた。このサンディングは、「確かに木工作業の一つのバージョンではあるが」<sup>16)</sup>、作業している人とその人が生活する環境との関係で、つまり、その人にとっての木と触れ合う作業の意味づけ、その作業に従事することで生まれる周囲の人々や、社会との関係は、全く考えられていないことを佐藤は指摘した。

佐藤とともに日本の作業療法教育、協会活動を先導していた作業療法士たちの中には、佐藤の国際性と情報網を頼りに、日本の作業療法が進むべき方向を指し示すように求め、納得のいく方向を彼から得た人もいたが、はっきりとした答えを得られなかった人もいた。彼女たちにとって、佐藤の作業療法に関する解釈は、しばしば難解で、明瞭さを欠いたものだった。

当時の佐藤は、環境との関係で人の健康をとらえる適応の考え方に注目するようになっていた。1992年には、佐藤は「作業療法は、疾病の治療よりも、人間とその環境との相互作用としての『健康』という観点から包括的にとらえる適応の概念が必要である。」と適応の重要性を力説した。ここで示された、環境と人間との関係を重視する考えの基盤には、佐藤が在籍した南カリフォルニア大学で、Reillyが作業療法学部全体を統一して、発展させようとした作業行動モデルがある。Ayersの感覚統合モデルも日常の生活環境に対する適切な反応を引き出して、その人の環境への適応を援助しようとしている。

このような状況で、1986年の日本作業療法学会中に当時の協会長矢谷の提案で、討論会「作業療法 その核を問う」が開催され、その議論は、作業療法はアクティビティーの治療的利用であり、実践学であるという比較的漠然としたところで落ち着いた<sup>21, 22)</sup>。佐藤は満足していたのだろうか？

佐藤の作業療法の核探しの旅は続き、ついに、作業科学に向かう。1993年に、佐藤は、作業療法理論の歴史の変遷を研究するために、日米の作業療法関連の代表的な論文を分析するという研修会を、日本作業療法協会主催の総論研修会として、企画、開催した。研修会に参加した作業療法士たちは、両国の作業療法の理論に関する論文と、各臨床分野の論文を分析した。この研修会で佐藤は、南カリフォルニア大学修士課程に

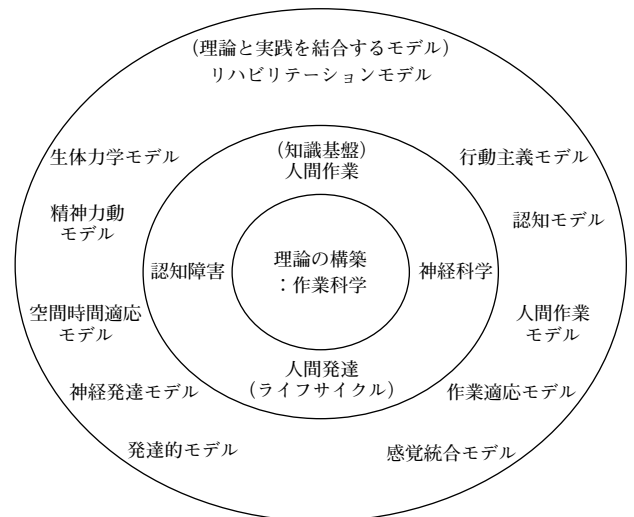


図2 作業科学、知識基盤および実践モデル  
Willard & Spackman's Occupational Therapy 第8版より、佐藤剛訳<sup>18)</sup>。

在籍していた時に、Reillyのクラスで行われた歴史的方法を採用していた。

この歴史的研究を経て、佐藤は追い求めていた作業療法の理論的核にやっと近づいていった。その核探しが、形を見せてきたのは、「作業療法が目指す方向として作業科学に言及するに至った」という1995年の彼の発言である。Willard & Spackman's Occupational Therapy から「作業科学、知識基盤および実践モデル」の図を引用して以下のように述べた(図2)。「作業療法は作業を中核としながら、個人と環境との相互関係に『適応』理論を柱として、モデル、パラダイムを形成していくのが妥当なように思われる。最近、作業療法独自の知識基盤として作業科学の構築に向けての議論が聞かれるようになった」<sup>18)</sup>。

### 作業科学と佐藤の夢

佐藤の夢は、歴史の中で見失われた作業療法の核探しだった。一人の作業療法士として、アイデンティティクライシスに苦しみながら、模索し続け、彼は作業科学にたどり着いた。1995年、佐藤は、南カリフォルニア大学作業科学作業療法学部の教授ClarkとZemkeを招き、講義、講演を開催して、日本の作業療法士に作業科学を紹介し作業科学セミナーを始めた。1998年札幌医科大学の大学院課程を設立したとき、作業科学の講座を開設した。何故、作業科学なのだろうか？そこには、歴史的必然性がある。核を探した佐藤が、作業科学に出会った歴史的必然がある。



20世紀初頭の作業療法の設立者が信じた作業の力を継承し、Reilly, Yerxaたちが推進した学術的な挑戦は、1980年代、1990年代のアメリカの作業療法界で大きなうねりとなった<sup>7, 8)</sup>。1980年代に南カリフォルニア大学の作業療法学部は、臨床の作業療法士をリードして、障害、病気を持った人たちに貢献するための学術分野を開拓するという目的で、博士課程の設立を申請したが、適応というキーワードで臨床のための理論（フレームオブレファレンス）を研究するという構想は大学から却下された。10年後、作業を研究する学問「作業科学」を申請し、基礎社会科学の一分野として、博士課程が認められた<sup>23)</sup>。この新しい学問への挑戦は画期的なものとして、心理学者のCsikszentmihalyiに、「Yerxaにリードされた若い研究者たちの勇気ある集団が、作業科学という新しい分野を目指した」と賞賛された<sup>24)</sup>。

作業療法が人道的な発想から生まれ、自然科学的な要素を取り入れながら社会の要請に応じてきたが、その後過度に時代の雰囲気の影響を受けて自然科学的な傾向を強めたという歴史的反省を背景に、作業科学の基本哲学は、その設立者たちの作業を中心とした哲学に立ち戻り、作業療法に貢献し、患者の健康、幸福を促進することだった<sup>8)</sup>。作業科学は、多様な学術分野の知識や理論を背景に、作業的存在としての人間を研究する、基礎学問である。作業とは、釣りをする、食事をする、将棋をするなど、日常生活で人がすることを指す。その目的は、人の健康と幸福に貢献することである<sup>23, 25)</sup>。

これからの日本の作業科学がどのように展開していくのか、楽しみにしていた日本人作業療法士にとって、佐藤の旅立ちは余りにも突然だったが、彼の残した軌跡は我々に彼の夢を伝えている。佐藤は1995年札幌において、歴史的分析を行い、日本の作業療法における還元論の影響を指摘し、包括的、人道的、科学的学問である作業科学を日本に導入する歴史的必要を強調した<sup>27)</sup>。佐藤は、その後、人類の健康に貢献する作業科学の普遍性を西洋社会の作業療法士たちと共同で発言するようになった<sup>26)</sup>。しかし、確かに、アメリカで生まれた作業科学は日本の土壌とは異なる文化的な背景を持つので<sup>28)</sup>、日本と西洋文化の違いに留意しながら、その理論、知識を導入し、日本の土壌に合った作業の科学を作り出していくことが必要である。そこから、日本の作業科学が世界の作業科学に貢献する可能性も生まれてくる。

確かに、佐藤は、我々に作業科学を手渡したのであ

る。日本の作業科学を作ることが、佐藤から夢を手渡された我々の使命である。そして日本の作業科学はこの日本作業科学ジャーナル発刊でその足跡を一步前に進めたことになる。

## ま と め

佐藤は、20歳代で健康の専門職になるために渡米して以来、作業療法関連の研究、教育に従事し、国際的なスタンスで作業療法という専門職のアイデンティティを探し続けた。激動の作業療法の歴史の中で、常に一步広い視野で将来を見ようとした佐藤は、必ずしも周囲に理解されなかったが、彼は核探しの旅を続け、作業療法の核として作業科学を日本の作業療法士に手渡そうとした。手渡された夢を引き継ぎ、日本の作業科学を作るのは我々日本の作業療法士である。

## 文 献

- 1) 日本作業療法士協会：2007年5月28日  
<http://www.jaot.or.jp>
- 2) 浅海奈津美, 守口恭子: 老年期の作業療法. 三輪書店. 2003.
- 3) 村田和香, 宮前珠子: わが国における高齢者を対象とした作業療法の効果. 作業療法ジャーナル, 36, 1317~1325. 2002.
- 4) 奥田睦美: 多様な課題を持つ高齢者を支える場作りをめざして. 作業療法ジャーナル, 35, 1205~1209, 2001.
- 5) Peloquin, S. M. : Occupational therapy service: Individual and collective understandings of the founders, Part 1. American Journal of Occupational Therapy, 45, 352-60, 1991.
- 6) Peloquin, S. M. : Occupational therapy service: Individual and collective understandings of the founders, Part 2. American Journal of Occupational Therapy, 45, 733-744, 1991.
- 7) Schwartz, K. B. : The history of occupational therapy. In E. B. Crepeau, E.S. Cohn, & B. A. Schell (Eds.), Occupational Therapy, p.5 ~ p.13, 2003.
- 8) Clark, F., Wood, W., & Larson, E. A. : Occupational Science: Occupational Therapy's Legacy for the 21st Century. In M. E., Neistadt & E. B. Crepeau (Eds.), Occupational Therapy. Philadelphia: Lippincott, p.13~p.21, 1998.
- 9) Meyer, A. : The philosophy of occupation therapy. Archives of Occupational Therapy, 1, 1-10, 1922.

- 10) Gritzer, G. & Arluke, A. : The Making of Rehabilitation. Berkeley, CA: University of California Press, 1985.
- 11) 鈴木明子: 日本における作業療法教育の歴史. 北海道大学図書刊行会, 1986.
- 12) King, L. J.: Toward a Science of Adaptive Responses. *American Journal of Occupational Therapy*, 32, 429-437, 1978.
- 13) Reilly, M.: The educational process. *American Journal of Occupational Therapy*, 23, 299-307, 1969.
- 14) Reilly, M.: Occupational therapy can be one of the great ideas of the twentieth century. *American Journal of Occupational Therapy*, 16, 1-9, 1962.
- 15) Yerxa, E.J.: Authentic Occupational Therapy. *Journal of Occupational Therapy*, 21, 1-9, 1967.
- 16) 佐藤剛: 四半世紀からの出発—適応の科学としての作業療法の定着を目指して. *作業療法*, 11 (1) : 8~14, 1992.
- 17) 佐藤剛: 作業療法の理論的体系—その概念的枠組み, パラダイムおよび実践モデルの発展と現状, *作業療法ジャーナル*, 29 (4) : 248~255, 1995.
- 18) 佐藤剛: 作業療法理論の再考, *総合リハ*, 23 (4) : 293~298, 1995.
- 19) 佐藤剛: 作業療法. *総合リハ*, 30 (6) : 512~515, 2002.
- 20) Kielhofner, G., & Burke, J. Occupational Therapy after 60 years. *American Journal of Occupational Therapy*, 31, 675-689, 1977.
- 21) 佐藤剛: 日本作業療法士協会全国研修会資料 (1998, 山形)
- 22) 佐藤剛: 作業療法領域の研究テーマの概観—日本と米国—これまでの日米のOT理論の分析とこれからの日本の作業療法の展望. *理・作・療法* 20 (4), 1986.
- 23) Clark, F. A. ・宮前珠子: 作業的存在としての人間を研究する作業科学. *OTジャーナル*, 34, 1157~1163, 2000
- 24) Csikszentmihalyi, M. Forward. *Occupational Therapy in Health Care*, 6 (4) , pp. xv-xvi., 1989.
- 25) Yerxa, E. Occupational Science: The foundation for new models of practice. New York, The Haworth Press, 1989.
- 26) 佐藤剛: 全国研修会資料 (1995, 札幌)
- 27) Clark, F., 佐藤剛 & Iwama, M. 万国共通の作業定義の構築に向けて. *OTジャーナル*, 34, 9~14, 2000.
- 28) Iwama, M. 普遍性という名の幻想: 日本の作業療法における文化的コンテクストの重要性. *OTジャーナル*, 37, 319~323, 2003.

# Occupational Science: Tsuyoshi Sato's Gift to Japanese Occupational Therapists

Etsuko Odawara

Seirei Rehabilitation Plaza IN Takaoka (Former: University of Southern California)

## Introduction

Sato was one of many pioneers of Japanese Occupational Therapy. He received his entry level in occupational therapy education and developed his professional specialization and graduate education in the US, returning to Japan to contribute to occupational therapy practice and research for children with special needs (especially relating to sensory integration), and to occupational therapy education, especially at the university level. He was one of a few Japanese occupational therapists with international fame and played a primary role in bridging between occupational therapy in Japan and the world. He introduced occupational science to Japanese occupational therapists in 1990s. Because of his sudden death we never fully learned why he did so and how this new focus on occupation fit his vision for Japanese occupational therapy practice, research and education. This paper presents an historical research investigation to understand Sato's dreams and aspirations for occupational therapy and how Sato's introduction of occupational science to Japan fit into those dreams.

## Methods

The researcher is a Japanese occupational therapist who was not Sato's student or colleague but was inspired and encouraged by him in her journey to develop within occupational therapy. For the historical study, data was collected using conversational or telephone interviews of 30 minutes to two hours, from 10 people, including Sato's family and occupational therapists from Japan, the US and Canada who knew him well. Topic directions of the interviews were planned depending on the relationship of the interviewee with Sato. His publications and handouts of conference presentations were also used as data.

## History of Occupational Therapy and Tsuyoshi Sato's Trajectory

In 1917 in New York, people with multiple career backgrounds gathered to establish the National Society for the Promotion of Occupational Therapy. They shared a belief in the power of occupation for promoting health in people with disease and disability, discussing how the profession of occupation was needed in American society. At that time of war, occupational therapy developed in American society allied with governmental support and that of medicine. Occupational therapists became influenced by reductionism and were inclined toward medicine's natural science perspective of patients and the original focus on the importance of occupation declined.

Japan imported occupational therapy from the US as a required profession for medical rehabilitation. In 1963, Japanese occupational therapy education started in Kiyose National Rehabilitation School in Tokyo. Sato was 20 years old when OT education started in Japan. He was a university undergraduate student, a physical education major. Inspired by Dr Kimura, a natural anthropologist in the university, he had a dream to study in the US for a health profession. Obtaining support, Sato was able to begin that dream, studying Occupational Therapy at California State University at San Jose, 1967-1970, and was certified as an occupational therapist in 1970. He worked in a day care program for adults with disability at Los Angeles County Hospital for a half year and then went back to Japan to teach occupational therapy at Kyushu Rehabilitation School in Kyushu.

Sato taught about occupational therapy for children with disability and inspired his Occupational Therapy students with international interests. His students and colleagues said, however, that he was not understood

by the faculty, including doctors, physical therapists and occupational therapists influenced by medical model. This may be partly because while the medical model was predominantly taught in the 1960's in Japan, in the US at the University of Southern California, Reilly had started to integrate occupational theory into clinical occupational therapy practice, developing a model of occupational behavior<sup>1,2)</sup>, and Sato's California Occupational Therapy education probably reflected some of that. In 1976, he went back to the US to develop his specialty in OT for pediatrics. While he worked as a practitioner for a school district in California until 1982, he finished a special education course at UCLA, a Master's degree in Occupational Therapy at USC and the Sensory Integration training conducted by Ayres. By this time, in the mid 1970s, American occupational therapy began a dramatic change. Leaders, such as Reilly, challenged occupational therapists to develop occupation based practice in communities with a background in which people with mental illness were released from hospitals for community-based care and people with physical disabilities time in hospitals were significantly shortened, while their life in the community lengthened. Sato was a witness and participant in American occupational therapy's upheaval, in 1960s-70s, when American occupational therapists were eager to establish theories and to develop specialties.

While Sato was a student in the US, Japanese occupational therapy education had begun. The Japanese government invited practicing American occupational therapists (not American occupational therapy educational theorists such as Reilly), often Japanese-Americans, to teach and then Japanese therapists previously educated in the US. These instructors provided their students with knowledge well influenced by the reductionist or natural science perspective of clients still prevalent in the early 1960s' US occupational therapy practice. Sato suggested later<sup>3)</sup> that the definition of occupational therapy in Japanese Physical Therapists and Occupational Therapist's Act had a similar inclination to the function centered concept in the US in 1960s and the historical influence of medical diagnosis centered practice was also found in textbooks used in this decade in Japan.

As a scholar and educator, Sato contributed to the

Sato's Mission: Searching for the Core of OT  
Sato's Occupation: Creating Bridge



Figure: Sato's Mission

establishment of graduate school level education in occupational therapy in Japan and delivered knowledge and techniques of sensory integration. Globally, he acted as a representative of Japanese occupational therapists for several decades and encouraged Japanese therapists to speak out in international conferences and congresses.

Sato's Mission

He gained a wide perspective of OT from his rich international experience and people admired his achievements as a renowned and experienced occupational therapy scholar. However, the more Sato was inspired with his mission as an Japanese occupational therapist while he experienced the diversity of international occupational therapy and its historical changes, the deeper his identity crises as a person and as an occupational therapist became (Figure).

His identity crisis came from his education and experience as an occupational therapists both in the US and Japan. Student immigrants to America often use an American name to assimilate to the society and culture and Sato was called "Tim". As he became better known internationally, Sato preferred to be called by his real name, "Tsuyoshi", probably because his identity as a Japanese was stronger and his status in international occupational therapy as a Japanese scholar was strong, but, because many people recognized him with his American name, he often failed to be called with his original Japanese name in the world occupational therapy scenes.

Sato was a witness to and participant in OT history,

both in US and Japan, where he suffered from professional identity crises. He said “I encountered a personal identity crisis as an occupational therapist... First, in the 1970s I was impressed that (Japanese) occupational therapists were placed in a situation in which they should have an identity crisis because of the medical model in occupational therapy, which our country adopted from America and use of medical model has intensified ever since.” Sato discussed the contents of textbooks that he used when he was a student in America to show that occupational therapy there had function-centered inclination into the 1970s. In 1970s, meanwhile, American occupational therapists had already been challenged to get out from the influence of the medical model and to search for comprehensive occupational therapy theory. At USC, Reilly coached the department faculty and students to theorize about the relationship between humans and the environment as occupational behavior, and to use this theorizing to regain the wholeness of occupational therapy. Sato experienced the tremendous shift of American occupational therapy from a reductionist view to humanistic view of patients. He also said “Second, I felt powerless (in Japan) when I heard occupational therapy called comprehensive and humanistic and felt it was in vain.”

#### Core of Occupational Therapy

Sato, while he went back and forth between Japan and US since 1967, had witnessed the American occupational therapist's move back from one paradigm to a different one. He had been excited to witness this historical change in American occupational therapy. As occupational therapy had developed in American society as a profession allied with medicine, voices questioning its inclination toward function centered practice and anxiety about the future of the profession emerged in the 1960s. Yerxa called for “authentic occupational therapy” 4). In 1970s, therapists recognized that establishing occupational therapy theory could lead practice. Reilly developed theories of adaptation, work and leisure, occupational role, based on the founder's ideas, (like Meyer's “Philosophy of occupation therapy” 5)) to establish models of occupational behavior. Sato witnessed, with excitement, American occupational therapists' innovational shift from the traditional medical

model and returned to Japan with a fresh inspiration for occupational therapy in his mind. In Japan, however, he felt dizzy, as though the profession had withdrawn, back to the past. He called it a “crisis of occupational therapists' identity” .

In the 1980s, his perception of an identity crisis of the profession motivated Sato to conduct a journey to search for core theory for occupational therapy. He emphasized in his papers and lectures that Japanese practice had the inclination toward reductionist ideas and function-centered approach. He also criticized the Japanese Occupational Therapist Association's definition of occupational therapy, illustrating its limitation with the example of a clinical practice of using sanding exercise more reminiscent of a facilitation technique than of a meaningful occupation. Finally, Sato suggested that the idea of adaptation, a core concept of occupational therapy, was missing in Japanese occupational therapy practice.

Many others worked with Sato, leading the occupational therapy profession in Japan. They would ask him for his ideas about the direction of Japanese occupational therapy but few were persuaded to agree with him. For them Sato's opinions and comments relating to occupational therapy lacked clarity and were difficult to understand. Sato discussed health as a relationship between the human and the environment. He was influenced by adaptation theories, Reilly's model of occupational behavior, Ayres' model of sensory integration and other ideas he had adopted, many of which came from the US.

In 1986 Japanese occupational therapists discussed “What is the Core idea of Occupational Therapy?” in their national congress, but the result of discussion was quite ambiguous. They decided that occupational therapy was the therapeutic utilization of activities and basically, rather than theory, was clinical practice. Was Sato satisfied with this result?

It seems unlikely, since Sato's search for the core of occupational therapy continued. He finally encountered occupational science. In 1993, he led a conference to analyze to review history of OT theories by review of occupational therapy articles in different fields of clinical practice and general theories published in the US and in Japan 6). In the conference, Sato used the same

methods which he had learned in Reilly's class when he was a graduate student in USC. After this conference he moved toward occupational science. In 1995, he declared that " I will call occupational science the direction of occupational therapy7) ."

#### Occupational Science and Sato's dream

Sato's dream was to find the core of occupational therapy lost in OT history. He encountered occupational science in his search while experiencing from identity crisis as an occupational therapist. In 1995, he invited Clark and Zemke from USC to introduce occupational science to Japanese occupational therapists beginning the Japan Occupational Science Seminar ( JOSS) series, of which there had been 10 by 2006. Why did he encounter occupational science? Because it was a historically essential.

The academic challenge of Reilly and Yerxa and others, which succeeded the heritage of OT founders in the beginning of the 20th century, became a tremendous movement in 1980s and 1990s in American and international occupational therapy. At University of Southern California, the Occupational Therapy Department (now the Division of Occupational Science and Occupational Therapy) first tried to develop concepts of adaptation to establish its PhD degree program, but this proposal was declined by the university. However, the proposal of the study of occupation as the core of an academic discipline for occupational therapy was accepted with enthusiasm by scholars from multiple disciplines. Occupational science, as a discipline, is based on the concept that occupation is doing something in daily life like fishing, eating and playing chess. Occupational scientists study humans as occupational beings, using multidisciplinary theories, concepts and knowledge. The purpose is to contribute to human health and well-being.

Occupational science was accepted as a social science PhD course in the university. This new discipline was admired by Csikszentmihalyi, a scholar of international fame in developmental positive psychology8) . Occupational science began with the historical review of occupational therapy, beginning with its humanistic views of human being and integrating a natural science view to contribute to social expectations, but finding

that occupational therapy had gone too far from its beginnings. Occupational scientists believe that the academic discipline's research can contribute to the development of an occupational therapy which promotes human health and well-being, physically, mentally and socially.

Sato's death was too sudden and much too soon for people who were looking forward to see the future of occupational science in Japan. However, Sato's trajectory shows to us, Japanese occupational therapists, his dreams and aspirations. It is clear that Sato has handed us the gift of occupational science. With his death, he handed us those dreams and aspirations. Our mission is to create occupational science in Japan. With this establishment of the Japanese Journal of Occupational Science have accepted his challenge and moved forward with a primary step in the development of occupational science in Japan.

#### References

- Reilly, M.: The educational process. *American Journal of Occupational Therapy*, 23, 299-307, 1969.
- Reilly, M.: Occupational therapy can be one of the great ideas of the twentieth century. *American Journal of Occupational Therapy*, 16, 1-9, 1962.
- Sato, T.: Shihanseiki karano shuppatu [Establishing future direction of occupational therapy in Japan]. *Sagyō Ryōhō*, 11,8-14, 1992.
- Yerxa, E.J.: Authentic Occupational Therapy. *Journal of Occupational Therapy*, 21, 1-9, 1967.
- Meyer, A. : The philosophy of occupational therapy. *American Journal of Occupational Therapy*, 31, 639-642 (Original work published 1922.)
- Sato, T: Sagyōryōhō no rirontekitaikei-sono gainenteki wakugumi, paradaimu oyobi jissenmoderuno hatten togenjou [The development and present situations of conceptual and theoretical framework, paradigm and models in occupational therapy]. *OT Journal*, 29, 248~255, 1995.
- Sato, T.: Sagyōryōhō no saikou [Occupational therapy: Review of theoretical foundations and present developments]. *Sougō reha*, 23 (4) : 293~298, 1995.
- Csikszentmihalyi, M. Forward. *Occupational Therapy in Health Care*, 6 (4) , pp. xv-xvi., 1989.